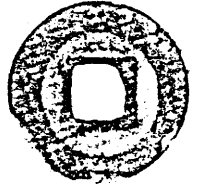
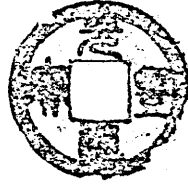
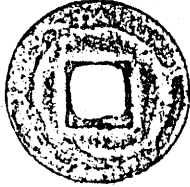
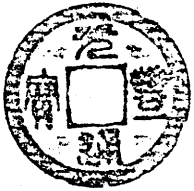


1. 元豐通寶



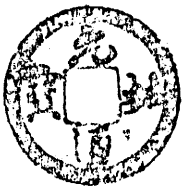
2. 元豐通寶



3. 元豐通寶



4. 元豐通寶



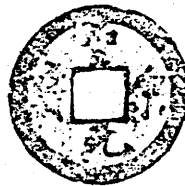
5. 元祐通寶



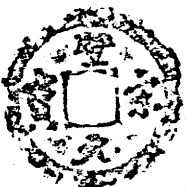
6. 元祐通寶



7. 紹聖元寶



8. 聖宋元寶



9. 聖宋元寶



10. 聖宋元寶

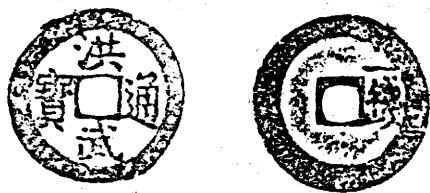
第25図 早稲田遺跡出土古銭(1:1)



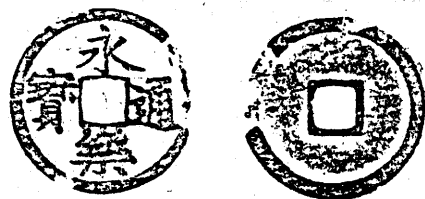
1. 聖宋元寶



2. 聖宋元寶



3. 洪武通寶



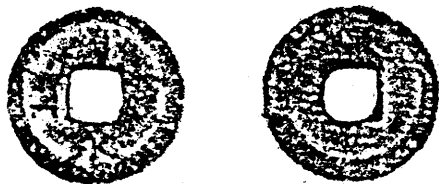
4. 永樂通寶



5. 永樂通寶



6. 不 明



7. 寬永通寶

第26図 早稲田遺跡出土古銭 (1 : 1)

ので、稀に鉄製の磬もあるといわれる。出土品として知られる最古の磬は松本市宮淵出土の蝶形磬（平安時代）が著名である。

当遺跡中世堅穴1出土磬は鉄製という点でも貴重である。平安時代などの古い磬の首稜は単純でシンプルなのに対して本資料はかなり尖っており、また股入りもかなり深く、時代的には下るものである。本資料を実見された香取忠彦氏（東京国立博物館金工室長）は諸特徴より室町時代の所産と考えられ、また坂詰秀一氏（立正大学教授）も同様の見解を示されている。磬に供伴した陶器類のうち片口鉢は長谷部楽爾氏（東京国立博物館企画課長）によれば室町時代でもやや古く南北朝期の所産との教示を得ている点より、磬と供伴する陶器との時代は合致している。

磬がなにゆえ陶器類とともに集積された状態で出土したのか、堅穴1との関係は、また堅穴1が式外早稲田神社の境内に位置する点より早稲田神社との関連等、究明しなければならない課題は多い。

(2) 鉄 鏃 （第27図1）

磬および陶器類の集中出土地点の下位よりクヌギの炭化種子とともに出土した鉄鏃とみられる三角形の鉄製品で、茎を欠き、先端は鋭い。

10 早稲田遺跡出土古銭

A・B両地区あわせて合計70点の古銭が出土している。今次調査区の土層は全体的に砂質ではあるが礫を多く含み、また夏場の調査ということもあり土層は一様にかたく締まり、古銭の検出には注意を払ったが、検出時にかなり破損してしまったものもある。出土した古銭のうちA地区中央の耕土にて表採した寛永通寶1点を除くすべてが中国渡来銭もしくは中世ビタ銭の類である。古銭は総体的に保存状態が良くない。陶磁器片同様に古銭もほぼ調査区全域から出土しているが、遺構にともなう状態で出土したものはきわめて少ない。明らかに遺構にともなう状態で検出されたものには、火葬墓7および8の墓壙中より検出された古銭をおいて他にない。火葬墓7の墓壙中からは骨片と陶器片1点にとまって6点の古銭が出土し、当時六道銭の習慣があったことを示す貴重な資料となっている。また火葬墓8の墓壙中からも1点の古銭が骨片や陶器片ともに出土している。

A地区における古銭の分布状況とその性格の概況をみれば、まず層位的には唯1点の寛永通寶が耕土上にて表採されている他はⅢ層上面からⅣ層面（地山面）までにおよび、垂平分布をみればA地区北部と南部に集中し、中央部にはほとんど分布がないことが知られる。（第15図）最も分布の濃厚なA地区北部においては上面に火葬墓やそれに関係すると思われる集石（火葬墓と捉えているが、あるいは火葬の場のような可能性も考慮したい集石部）が、下面には性格のはっきりしない石列があり、これらの存在から多くは副葬銭としての性格を想定することができる。A

地区南部出土の古銭はすべて石垣状遺構、つまり基壇状に整地された面からの出土で、何らかの建物の存在から遺失銭、あるいは奉賽銭としての性格が想定されよう。

B地区出土の古銭は量は少ないが大部分竪穴遺構上面の耕土および覆土上位の出土であり、この地が早稲田神社の境内に位置する点より奉賽銭も考慮されるが、あるいは竪穴遺構にともなうものとすれば遺失銭としての性格の方が強い。早稲田神社西裏手の山麓より過去に出土し、現在同社神宝となっている約100キロ、11,292枚の古銭は備蓄銭であろう。

当遺跡にて出土した古銭は銭文の判明したものについてのみみれば、唐銭の開元通寶、北宋銭の大平通寶・至道元寶・咸平元寶・景德元寶・祥符元寶・天聖元寶・皇宋通寶・嘉祐通寶・治平通寶・熙寧元寶・元豊通寶・元祐通寶・紹聖元寶・聖宋元寶、明銭の洪武通寶・永楽通寶などの渡来銭と唯1点寛永通寶があるが、寛永通寶についてはその出土状況より除外してもよい。渡来銭としたなかには多くの中世私鑄銭が含まれ、観察可能なものについては一覧表に記した。中世私鑄銭のなかで、洪武通寶には判読不明ながら背字があり、銭質から加治木系洪武の可能性はあるが、有名な「背加」とは異なる。いずれにせよ渡来銭としたなかには相当量の中世から近世初期にかけて私鑄された所謂ビタ銭が混在していることは明らかである。

渡来銭（ビタ銭も含む）は唐銭・北宋銭・明銭で、南宋銭・元銭を欠いているが、北宋銭が主体となっているのは中世における他遺跡の例とも同様で、当時の渡来銭の流入状況を示している。渡来銭の全盛は北宋時代および明時代であり、各地で発掘される渡来銭も北宋銭が主体で、それと明銭の永楽通寶・洪武通寶が多いといわれている。

当遺跡で検出された古銭の多くは相当に火熱を受けており、よってろいものが多い。これは火葬墓との関係や包含層（主にⅢ層）中の木炭粒とも関係があろう。

表8 早稲田遺跡出土古銭一覧

図番号	銭名	古銭番号	鑄造年(中国)	遺構	出土区	特徴	備考
22-1	開元通寶	062	唐 621年		B	面背に付着物、青錆色	
2		019			A 04 B	銭文明瞭、太字、緑灰色	
3		035			A 04 A	保存きわめて不良、腐蝕	
4		044		石列 3	A 03 B	銭文明瞭、暗緑色	
5		050			A 05 C	下半を欠くが保存良好、銭文明瞭、緑灰色	
6		A03,004			A 03 A	鑄縮、厚い、面潰れる、背平夷、広郭、潤縁、緑灰色	中世ビタ銭
7		017		火葬墓 7	A 03 Y	面背に鉄錆色の付着物	
8		S A 02		中世竪穴 2	B・I	腐蝕、青錆色	
9	大平通寶	006	北宋 976~ 983年		A 04 C	保存良好、灰緑色	

図番号	銭名	古銭番号	鑄造年(中国)	遺構	出土区	特徴	備考
10	至道元寶	037	北宋 995~997年		A01A	草書至道、潤縁、面肌せまく凹凸多い、灰白色	加治木系改造ビタ銭?
23-1	咸平元寶	025	北宋 998~1003年			保存良好、灰緑色	
2	景德元痕	018	北宋 1004~1007年		A04A	保存良好、銭文明瞭、若草色	
3	祥符元寶	031	北宋 1008年	石垣状遺構	A10C	銭名明瞭、黄緑色	
4	天聖元寶	011	北宋 1023年	火葬墓 7	A03Y	篆書、元豊通寶(No010)と重なって出土	
5		034		石垣状遺構	A10C	背平夷、暗褐色、中国銭	
6		063		中世堅穴 2	B-I	篆書、面に孔多し(鑄抜け?)不良、字体に特徴、灰白色	中世ビタ銭
7	皇宋通寶	016	北宋 1039年	火葬墓 7	A03Y	面背とも縁一定せず、皇字の白小さい、宋上がる、通小さい	中世ビタ銭
8		001		火葬墓 6	A03A	銭文潰れ、皇字の白小さい、小字、潤縁広郭、薄手(0.8mm)	中世ビタ銭
9		051			A05C	篆書、面背に付着物(背には骨粉?)	中世ビタ銭
24-1	嘉祐通寶	033	北宋 1056~1063年	石垣状遺構	A11C	面背に付着物、銭文不明瞭	
2		021		石垣状遺構	A11C	篆書、銭文潰れ、郭抜け気味	中世ビタ銭
3	治平通寶	027	北宋 1064~1067年			銭文明瞭、背平夷、緑色に近い	
4		012		火葬墓 7	A03Y	銭文明瞭、背平夷、明灰色	
5	熙寧元寶	032	北宋 1068年	石垣状遺構	A10B	篆書、面背に黒色の付着物	
6		038		石列 3	A03B		
7		069		中世堅穴 1	B-I	銭文明瞭、背広郭、潤縁、青味のある灰色	
8		009			A05A	背に木質状の付着物、面背ともあれる	
9		SA02		中世堅穴 2	B-I	面背ともに黄白色の付着物	
10	元豊通寶	030	北宋 1078年	石垣状遺構	A10C	銭文潰れ不明瞭、背縁郭とも一定せず、鑄抜けあり、肉厚一定、白味がかかる	鑄写しビタか?
25-1		048		石列 3	A03B	銭文に鑄出されていない部分あり、背穿は円穿状になる、黒色に近い	中世ビタ銭
2		A05B			A05B	篆書、銭文潰れ、元字最終下がる、背潤縁広郭、暗灰色	
3		010		火葬墓 7	A03Y	篆書、面背ともに明瞭、薄緑色 No.011と重なって出土	
4		057			A04C	篆書、大字	
5	元祐通寶	SA01	北宋 1093年	中世堅穴 1	B-I	銭文明瞭、灰緑色	
6		036		中世堅穴?	B-I	通字大きく、元字最終があがらない	
7	紹聖元寶	054	北宋 1094~1097年		A05A	面アレ、不明瞭、篆書	中世ビタ銭

図番号	銭名	古銭番号	鑄造年(中国)	遺構	出土区層位	特徴	備考
8		026		中世竪穴	B	面に付着物、緑灰色	
9		068		中世竪穴	B	小字、背平夷、面に付着物、緑灰色	中世ビタ銭
10	聖宋元寶	067	北宋 1101年	中世竪穴	B	小字、背平夷、黄褐色	中世ビタ銭
26-1		052			A03B	背縁ズレ、銭文不明瞭	中世ビタ銭
2		070				銭文不明瞭、銅質不良	中世ビタ銭
3	洪武通寶	058	明 1368年	中世竪穴	B・I	面肌高い、広輪、肉厚(2.1mm)背字あり(不詳)、黒味があった灰緑色	加治木銭
4	永楽通寶	027	明 1441年	工房址1	A05B	銭文明瞭、保存良好、緑灰色	
5		SA02		中世竪穴2	B・I	青錆著しい、面に厚い付着物	
6	不明	022		石垣状遺構	A10C	篆書、銭文不明、黄褐色	
7	寛永通寶	表採			A中央・I	摩耗、新寛永(寛文8年以降)	(日本鑄)

11 早稲田遺跡出土鉄製品・石製品

A地区のⅢ層中には多くの鉄滓が含まれており鍛冶工房址の存在を示したが、鉄製品とみられるものの出土はほとんどなかった。少量の鉄片を除けば器種のわかるものは刀子?と火打金具程度である。工房址の存在を示す資料としては鉄滓の他にフィゴの羽口小片が3点ほどある。硯とみられるものはA地区より2点出土し、砥石もA地区より小片を加えて10点余の出土がある。石鏃3点は縄文時代の所産である。

(1) 刀子

保存状態がきわめて悪く実測図示できないが、幅1.0cm、長さ12.5cmほどの残存である。茎先と切先を欠いているが平安時代の住居址などから検出される例の多いタイプの刀子である。A地区中央部の包含層からの出土である。

(2) 火打金具(第27図2)

A地区南部にある石垣状遺構面より白瓷碗底部とともに出土した三角形状を呈した板状鉄製品で、火打金具とみられるものである。保存状況は比較的よい。

(3) 鉄滓

個々に図示しえないが、一斗缶一杯ほどの量の大小様々な鉄滓がA地区全域より出土している。

鍛冶工房址の一施設とみられる工房址Ⅰ・Ⅱ部分などには特にこの鉄滓の集中する傾向がみられた。子指大のものから拳大のものまで様々であるが、なかには碗状のものに入れられたまま冷却したとみられるなめらかな面をもつ大きなものや、羽口とみられる一部を付着させたものもある。

(4) 硯 (第27図3・4)

火葬墓周辺より1点(4)と石垣状遺構上面の土石流とみられる集石中より1点(3)の合計2点が出土している。3は硬砂岩の扁平礫の片面に凹部をもつもので、あたかも石皿のミニチュア状を呈している。4は通例みられる黒色の粘板岩系統の素材に研磨を加え側面成形しているが破損が著しい。

(5) 砥石 (第27図5～11)

A地区から10点余の砥石が出土しているが、いずれも小破片である。砥石には、当擦型(5～8)、把握型(9)、据置型(10・11)が認められる。6は火葬墓1の集石中より、7は火葬墓5の集石中より、また10・11は石垣状遺構上面より出土している他は包含層からの検出である。砥石はいずれも著しく摩耗し、破損したもので、相当に使用されたことを示している。5を除くすべてが白色ないしは黄白色の粘板岩による砥石で、側面に砥石製作時に母岩から切り出された痕跡を残している。今日の自然石砥と同様に製作されている。

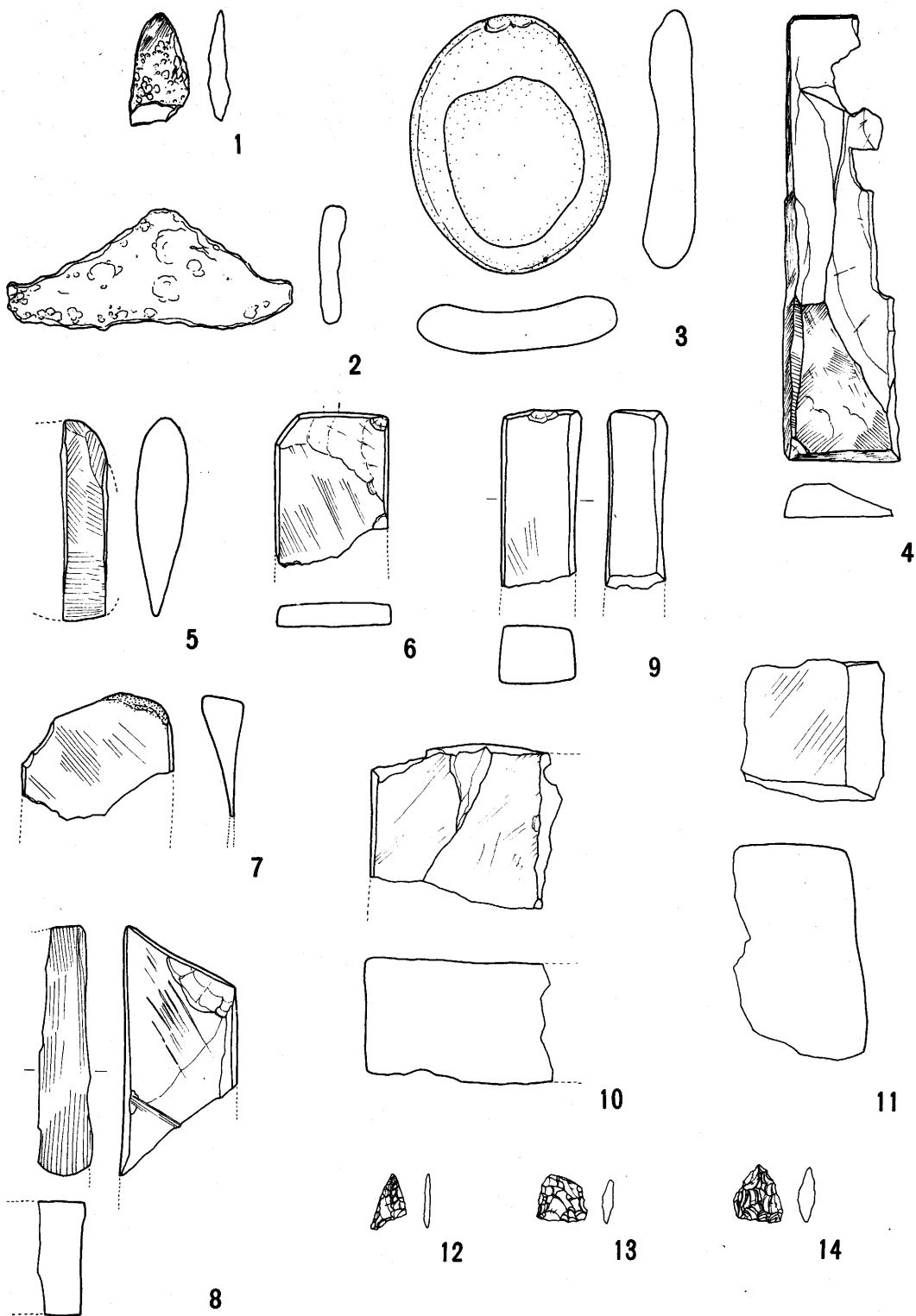
(6) 羽口

図示していないがフイゴの羽口数点がある。いずれも小破片で鉄滓およびコバルト色のガラス質付着物がみられる。この地で鍛冶製鉄が行なわれたことを示している。

※ (7) 石鏃 (第27図12～14)

A地区包含層より3点の石鏃が出土している。いずれも暗茶色のチャート製で、製作は一様にラフである。縄文時代でも晩期の可能性が強い。他に同質のチャート剥片が10点余、黒曜石片が1点ある。

(※縄文時代の石器項に遺漏してしまったため当項に記した。御容赦願いたい。)



第 27 图 早稻田遺跡出土鉄鏃 (1)、火打金具 (2)、硯 (3・4)、
砥石 (5~11)、石鏃 (12~14)

おわりに

以上、早稲田遺跡出土遺物について概略を記したが、個々の遺物について詳細な分析を完全に終了していない。もとより中世から近世に至る陶磁関係については調査団内においても専門的な知識に乏しく、多くを詳細に分析しえぬ状態であり、期間内に報告書をまとめるにあたり、陶磁専門の立場から多くの御教示を賜わることができなかったことは残念であった。しかし、出土遺物を可能なかぎり図示することによって今後の研究に供する資料紹介的な性格をもたせることができたことは幸いであった。遺物の多くが小破片のため復元実測には難点も多いことは否定できない。また陶磁に至っては縄文式土器等と異なり胎土の特徴や微妙な釉の調子や肌の色調等、実測図では示しえない面もあり、一覧表を作成したが、これとて観察者によって把え方が一様でない難点があり、この種の資料扱いのむずかしさと限界を痛感した。今村団長の努力で調子に多少の難点はあるにせよ、巻頭に遺物のカラー図版を掲載することができたことは、少しでも遺物を生かす方向としては幸いであった。図示した遺物について参考にされる場合は、必ず実物にあたっていただくことをお願いし、我々の観察の不備を補っていただきたい。

遺物については調査団内はもとより多くの方に御指導賜ったが、何分整理期間中にそれを生かすことが不可能であった。よって文責はすべて酒井にあることを明記しておく。現在、早稲田遺跡出土遺物のうち特に白瓷系の練り鉢を中心に分析を進められている鋤柄俊夫氏には多くの御教示を賜った。氏の論考におおいに期待するものである。

本書は限られた期間内に刊行することが義務づけられており、遺物については整理に時間を要してしまっただけ報告書としては、はなはだ不本意な体裁をとらざるを得なかったことをおわびしたい。本文中にて今村団長が提言されているように、慣例的な単年度契約の場合はどうしても整理作業が遅れがちであることからして、発掘調査と遺物整理作業や報告書作成の契約を別にすることの必要を痛感している。

遺物編ともいうべき本稿を追掲裁するにあたり、時間的に手間どり阿南町教育委員会、今村調査団長はじめ関係各位には多大なる御迷惑をおかけしてしまった。心よりおわび申し上げます。

今後、再度これら豊富な資料にあたり、報告書では生かしきれなかった多くの問題について調査・研究を深め、早稲田一帯の歴史の上に生き生きと諸遺物を蘇らせる努力をしていきたい。

文末ではあるが当遺跡出土の鉄磬や一部の陶器について特に御教示を賜った諸氏名を記し、感謝と御礼を申し上げます。

坂 詰 秀 一 氏 (立正大学文学部教授)
香 取 忠 彦 氏 (東京国立博物館金工室長)
長谷部 楽 爾 氏 (東京国立博物館企画課長)
遮 那 藤麻呂 氏 (日本考古学協会員)

(酒井)

早稲田遺跡 その2 阿南町西条早稲田宮下地籍

昭和58年3月

発行 長野県飯田建設事務所
長野県下伊那郡阿南町教育委員会

印刷 新葉社
飯田市常盤町飯田商工会館内